

僕を支える「ちから」

岩手県北上市立北上中学校

三年 梅 木 龍 世

僕の中学校生活は大変だった。学校に行くと、吐きそうになる。周りに人が多くなればなるほど、その人たちの前で吐いてしまうのではないかという不安が強くなってしまふ。

その症状は、小学六年の三学期に胃腸炎がはやり、給食後、教室で吐いてしまった友達を見てから始まった。自分も同じように吐いている姿が頭に浮かんだ。その一週間くらい前に自家中毒をおこし、僕自身も家で何回か吐いていたこともあり、自分は大丈夫だと思えなかった。給食が食べられなくなり、強迫観念から学校を休んだ。卒業式にも出られなかった。

中学校に行けば、治るのではないかと考えたが、実際それは甘い考えであった。入学式の途中にはもう体育館にすることができなくなり、保健室にいた。教室に戻ることはできなかった。それでも、慣れるという目的で二時間だけ登校し、別室で過ごすことにした。二時間。こんな簡単なことでも僕にとつてはとてもきつかった。給食を食べなくてよいとわかっていても、学校にいただけでも恐怖を感じ、緊張して息が詰まりそうになる。次第に、クラスに入ることのできない、部活に行かない僕を周りが見ているのか気になるようになった。朝、学校に行く前からそのことを考えていて気が沈んだ。毎日、学校が嫌な自分と戦っていた。時々、負けることもあった。

自分自身を不甲斐ないと感じる時、父がいてくれたらと思うこともあった。父は、僕が小学六年の春にがんで亡くなった。僕にすれば突然の死だったし、ミニバスに夢中になっていたこともあり、大泣きするほどの悲しみもなく生活が続いていた。けれど、学校生活に適応できなくなってからは、父をよく思い出した。ミニバスの応援をいつもしてくれた父。きつと、学校を休むことを許さなかっただろう。

「休むことはダメ。」と強く言ってくれただろう。それから、バスケットの練習相手もしてくれただろう。辛いこと、嫌なことから逃げ出すなど叫び、支えてくれたはずだ。そして、僕の中学校生活は、学校に当たり前に通い、バスケットに熱中するものだった。でも、現実はずう。もう二度と会えなくなってしまったのだ。強い胸の痛みを僕に誰にも話すことなく抱えていた。

今にして思えば、僕は、「吐きたくないのに吐いてしまふ」と、「死にたくないのに死んでしまふ」ことを無意識のうちに重ねていたのかもしれない。自分の意志ではコントロールできない何か大きなものが近くに潜んでいて自分をとりこんでいくような気がしていた。それが、恐怖であり、不安だった。いつも緊張し、疲れを感じていた。

しかし、三年生の二学期が始まった今、僕は、当たり前前の生活をしている。朝、自転車で時間通りに学校に来て、自分のクラスで授業を受け、給食を食べ、掃除をし、友達の冗談に笑ったり、今度の文化祭の学級合唱はどうなるのかなと考えたりしている。三年生になってからの欠席日数は0日だ。僕は、

当たり前前の生活を取り戻すことができたのだ。

きっかけは、二年生の初日の朝に、小学校からの友達の家へ迎えに来てくれたことだったと思う。新しいクラスに一人で入るのは、心細いだろうと、いつもしている駅伝の練習を休んで、家に寄ってくれたのだ。彼の優しい心遣いが、自分が一人で生きていくのではないことを感じさせてくれた。そして、たくさんの方々に、ずっとこうやって支えられてきたことに気づいた。母は、毎日毎日車で送り迎えをしてくれた。「私の一番の願いは、あなたが毎日楽しく学校に行けることだよ。」と、時には泣きながら、時には仕事のシフトを変えてでも、学校に送り出してくれた。「あと、五分。」「もう十分。」「大丈夫、君ならきつとできるよ。」僕のわがままを受け入れ、一年生の一年間をかけて、少しずつ、給食前まで時間を延ばして居ることができるようになってくれたのは先生方だ。小さな目標を達成することで、恐怖感を取り除いていく僕を見守ってくれた。クラスの友達も、短い間しか教室に入らない僕のことを温かく迎えてくれた。父がいなくなってしまつても、僕は一人で生きているのではなかったのだ。

自分でコントロールできないものへの不安や恐怖から逃れられたのは、周りの人が支えてくれたからだ。とても感謝している。だから、今度は僕が、人を支えられる人になっていきたい。そのために、もっと広い世界に出て、勉強し、一生懸命打ち込むことを見つけ、自分に自信をつけたいと思っている。それだけではない。僕はこの経験をただ辛く嫌な思い出にしたくない。大変だった中学校生活をこれから先の僕を支える「ちから」にしようと思っっている。